

第二十二章 ハルビンを目指せ

今も昔もそうだけど、どれが敵でどれが味方なんて概念はない支那大陸。その場その場のご都合で自分に有利か不利かで強い方になびく民族性に萌ゆる大空軍曹も辟易していた。

一応表向きの敵は中華民国国民党で、まだ共産党の八路軍あたりまでは何となく許容できる。そこに土着民の匪賊や、個人営業の反乱者までいつ誰が凶器を持って襲い掛かってくるかわからない毎日。道理や筋道なんて関係なくその場の気分でもうどうにでも変貌する民衆。兎に角、常に自分が有利な条件に身を置いていないとわが身が危ない。

今回のハルビン警護の任務が終わったら南方戦線への異動の打診があつたので、戦局は厳しくてもまだ敵がはつきりしている方が手腕を発揮できると応じていた。

ソビエトが不穏な動きをしていることや、その意を受けた抗日パルチザンがうごめいていることなど情報は多々入り込んできたが、疑ってみれば皆が敵に見える。全く精神衛生上好ましくないと、南崗(なんが)の体育館建設現場を巡回していた。

「萌ゆる軍曹さん！」

呼び止められて振り向けば牡丹江付近の開拓村の満蒙開拓青少年義勇軍の左右翼青年が馬車に乗っていた。

「おお！ウヨクさん！こんなところで会うなんて奇遇ですなあ。」

萌ゆる大空軍曹とその部下が開拓団の警護に行つたときに、馬賊の匪賊を手引きしていた朝鮮人を始末してから馬賊の襲撃が少なくなったことを左右翼が報告した。

この朝鮮人は朴と言う男だったが、日本人名木下を名乗り、開拓団の警護の状態などを馬賊に教え、奪った農産物を転売するなど姑息なことをやっていたようだった。

黒竜江省にはもともと朝鮮民族が多く、そのネットワークを利用して開拓村から農産物を買取って売る仕事もしていたが、左右翼たちが自分たちで直売まで手掛けたら、連中に大幅に中抜きされていたことなどもわかった。

「こちらに小豆の販売に来たついでに、少し日銭を稼ごうかと思つて、こうして馬車で荷物運びの仕事をしているんですよ。」

左右翼青年は体育館へ運び入れる機材の運搬を馬車を持ち込んで請け負っていた。

「開拓団の皆さんも御息災のようで良かったです。お互い頑張りましょう。」

左右翼青年と別れて、建設現場から市街地に向かつて歩いて行くと、荷車を引く怪しそうな人物を見かけた。左右翼青年のように建設現場に資材を運ぶ労働者と言つてしまえばそれまでだが、すれ違った時の気配が怪しかったので、振り向いてその荷車を停めた。

「荷物を改めさせてもらおう！」

と、荷車に近づくなり、その男は血相を変えて建物間の路地に逃げ込んだ。部下に命じて追いかけてさせ、荷車に積まれた木箱を確認すると、ライフル銃が二十丁入つていた。

”小唄どどいつ何でもできて お約束だけ出来ぬ人” 惚れた数からふられた数を 引けば女房が残るだけ”

ライフル銃には小粋などどいつが刻まれていた。

「都都逸が書かれていることは、ドイツ製か。ということは国民党の便衣兵か。」
国民党にはドイツから銃火器が入っていた。ドイツは日本と同盟国であったが裏ではこうした戦略がうごめいていた。

銃声が二発鳴り響いた。その音から日本軍の銃であることが分かった。

満州で暗躍する土匪にもいろいろな集団があったが、その多くは思想信条ではなく、無防備な村を襲って物を強奪してくることで生活している連中だった。

土匪を操って開拓民を襲うコミンテルンの息がかかった女がいた。李高順と言う朝鮮人で、たか子と言う日本人を名乗って日本人社会にも入り込んでいたので、土匪たか子と呼ばれていた。

土匪たか子は悪烈ぶりから名前も顔も知られすぎていたので、トン・チャンと言う温厚なじいさんを頭目に担いで、その陰で組織を仕切っていた。

土匪たか子は拳法大窮状(けんぼうだいきゅうじょう)という武術思想の信者で、銃火器を用いず「話し合いで」農村を襲撃することに執着していた。

そのため萌ゆる大空軍曹達「秋の味覚、紅葉と匪賊狩りの旅」旅団の銃火器におよそ半分を越える仲間の匪賊を失い、組織は傾きかけていた。

拳法論者の無策が招いた「半身哀れ大神災」と呼ばれる事体になった。

土匪たか子たち一派は集団的自衛権を否定したために、萌ゆる大空軍の襲撃を受けた時に他の匪賊の協力を得られず、無策も相まって、孤立無援の状態で崩壊の危機を迎えた。

「何事にも初めてのこともだもんで。」

と、頭目のトン・チャンは言い訳をしたが、その初めてのことが最後を呼び込んでいた。

「亞乃朝鮮女乃言雨虎斗仁霸雲座璃墮是 夜路死苦(あのちようせんおんなのいうことにはうんざりだぜ ヨロシク)」

「京津乃聖出何人喪仲間乎死奈世手死末汰 夜路死区(あいつのせいでなんにんもなまをしながらしまった ヨロシク)」

基本的に個人営業の匪賊、利益が絡まねばポツと出てきた親分に黙って従っているはずはない。匪賊たちの間にも土匪たか子に対する反発の声は上がっていた。

「今乃時代、素手矢刀出鉄砲仁太刀打血壽留乃霸無理墮 世炉死句(いまのじだい、すでやかたなでてつぼうにたちうちするのはむりだ ヨロシク)」

「殺鎖礼汰仲間乃恨魅、蘇濃血霸羅死手矢留是 世露死九(ころされたなかまたちのうらみ、そのうちはらしてやるぜ ヨロシク)」

匪賊たちの恨みは土匪たか子に向かっていた。しかし、そんなことに気が付くほど繊細な感性は持ち合わせていなかった。

ハルビン体育館の落成式に日本人が銀河鉄道で乗り込んでくることを知った土匪たか子は、自らの身が狙われていることも知らずに息巻くのであった。同時に、朝鮮北部にいた抗日パルチザンが二百人を超える人員を引き連れて満州に向けて出発した知らせが入った。土匪たか子は声を高らかに宣言した。

「山は動いた！」

朝鮮名白頭山(ヘクトサン)、中国名長白山(チャンパイシャン)。二千七百七十七メートル

の大した山ではないが、朝鮮半島で一番高い山になっている。

この山の中で生まれたことになっている金日成は、阿保野論気二等兵のトラックにつぶされて死んでいるのだが、一応その代役もこの山の中で生まれたと言うことになっている。おおよそこんな隔絶された山奥で生まれ育った者が真つ当な社会生活など営める感覚を持っているわけではないのだが、そこそこだけは継承されている。

この白頭山を越えて満州に入り込む三百人の大軍団がいた。瑞穂こと趙春花が率いる集団だった。

別に、こんな山を越えなくても満州に入る手立てはいくらでもあったのだが、瑞穂は自らを神格化するために大集団を率いての山越えを決行した。

大した山ではないとはいえ白頭山と呼ばれるだけあって、山の上は雪が積もっていた。この国境の山頂にたどり着くまでに既に集団の一割が死亡していた。

「こんな集団にくつついてくる連中だつてロクなものはない。大方は朝鮮人であったが、何の努力もしないで「頭が悪いのは親が貧しいからだ。」とか「良い就職ができないのは家が貧乏だからだ。」とか、「女にもてないのは社会的地位が低いからだ。」などと、誰かに責任を擦り付けて怠惰な生き方をしている連中だった。

そんな自分たちが世の中の主役になれると甘い言葉で誘い出し、都合よく操って切り捨てるのがコミンテルンの常套手段だったが、妬みと虚栄心の塊はこうした言葉にいつも簡単に乗せられるものだ。

この集団の中にも二つの流れがあった。ひとつは相手を殴り倒して言うことをきかせる体力系のグループで、この大遠征の中では煮炊きの薪などを拾いに行かされていたから「柴木隊」と呼ばれていた。

もう一つは何もできない、しようもしないあご髭を生やした怠け者のグループで、自分で何の労力も提供せずに強いるばかりのズルい連中だから「強いズル(シーズル)」と呼ばれていた。

「柴木隊」は体力あるけど頭がスカラカン、「強いズル」は口先だけは達人なのでそこそこうまく折り合いがついていた。

白頭山の頂上には天池と呼ばれるエメラルドグリーンのカルデラ湖がある。

「我らが共産主義革命を成し遂げたら、この池の水はブルジョワたちの血で真つ赤に染まるであろう！」

「おー！」

瑞穂の檄に歓声を上げる青年たちと七十前後のジジババたちだった。

予定ではここから南に下山して満州に入り込む計画だったが、地図を任されていたのが奥田と言う「強いズル」の代表だった。あご髭を生やし目が点になって視点が合っていない馬鹿だったが、恥を知らないでどんな所にも臆さずに顔を出す図太さが買われて、瑞穂に書記を任されていた。でも、読み書きはできなかった。

通常、方位磁石は北をさすものである。前が北なら右が東、後ろが南、左は西と言うのが世間の通り相場であるが、親が裕福であれ貧乏であれわからない奴はわからないのである。

「針は向こうをさしている！」

方位磁石の針が向いたほうを指さす奥田であった。これだけ人がいれば誰か一人くらい北

と南の違いを気が付きそうなものだが、お仲間の言うことは全て「真実」と受け入れてしまつたため、事実ははまつたく見向きもしない。一行は南に向かっていると思いつながら、実は北に向けて行進を進めていることなどまつたく気が付かなかつた。

「戦争反対！ 安保反対！ヘイト反対！」

太鼓を鳴らし長い山の尾根を藪こぎしながら下りる一団。時折、火山性の磁気を持った岩盤に方位磁石が狂い、同じ場所をグルグル回りながら平坦地に出た頃には、出発時に三百人いた集団が半分になつていった。

平坦地と山の境に一軒の農家の家があつた。

「革命遂行のため、食料をカンパしてもらいに行つてきます。」

行動派の柴木隊はその民家に向かつたが、それが略奪であることは誰もが知つていた。普通の人が行えば略奪だけど、共産主義者ならカンパと言つのが彼らの論理だつた。

柴木隊は民家に押し入り家の中にいる住人を殺害すると、家の中にある食べ物や使えそうなものを物色した。

「エチアマンユドゥ？フランス語かな？わからへん。」

かろうじてローマ字が読める男が箱に書かれた文字を読んでみたが、何が書かれているのか皆目見当つかなかつた。

柴木隊が押しかけ虐殺した家の中には木箱があり、その箱には dynamite と書かれていた。中には紐が出た筒状の物体が詰められていた。

「日本語も書かれてるで、トイナイダ？なんだろうこの筒は？」
戦前の横書きは右から左に読むのだった。

筒の中にはスープのようなものが入っている保存食だろうと、試しにこの民家のかまどに入れて試食してみることにしたのだった。

ドカーン！一発火花が吹きあがると次々と箱の中のダイナマイトに引火して、その民家の周辺は大きな穴が開いてしまった。

民家に住んでいたのは農民を装つた中国共産党員で、八路軍の隠れ家だったのだ。

こうして柴木隊は壊滅してしまつた。

掖河（えきが）第126師団は八路軍ゲリラを追いかけて黒竜江省から吉林省に入り、長白山の麓に野営していた。

夕食も終わり、兵士たちは天幕で寝泊まりの準備を始めていたが、遠く山の麓で爆音と火柱が立ち上がるのを見て、一気に緊張が走り、天幕を回収して移動できる準備をした。

周辺の部隊に無電で確認したが、このあたりで戦闘状態になつている部隊はいない。さっそく斥候を派遣することになり、一台の軍用トラックが現場に向かつた。

荷台には守礼都徒郎（もれととろう）二等兵が乗つていた。

斥候部隊は爆発現場に到着すると周辺に敵がないか警戒しながら現場を調査した。現場には爆発で吹き飛ばされたおびただしい肉片が飛び散つていた。技術兵がざつと見たところ、ダイナマイトの爆発で、二十人を超える死者が出ていることが分かつた。

「なぜこんな山奥の一軒家にそんなに人が集まっていたのだろうか？八路軍に違いない。」
電信により野営隊を通じて各地の部隊に打電された。

翌朝、周辺の各部隊から兵が集まり、爆発で吹き飛んだ遺体や衣服、所持品などから八路軍のほかに抗日パルチザンの者たちがいたことがわかってきた。おおかた仲間割れで争った時に抗日パルチザンの朝鮮人が火病を發してダイナマイトに引火したのだろうと推察された。守礼二等兵は秋田マタギの末裔である。彼は現場周辺の足跡からいくつかの事実を發見した。

足跡は別の場所からこの家に向かって歩いてきた足跡で、ここから立ち去った足跡がないことを發見したのだった。

守礼二等兵はその足跡の出てきた場所をたどっていくと、百人を超える人がいたであろうと思われる場所を發見した。

伝令を受けて各部隊から腕利きの兵隊が派遣され守礼二等兵は斥候隊長に任じられた。足跡を追跡する守礼斥候隊長から十数メートル離れて銃剣を構えた兵士が足跡を荒らさないようにつけてきた。

尾籠な話になるが、動物の進化、強弱関係と言うのは面白いもので、捕食される草食動物などは糞を垂れ流しする性質を持つ。もちろんこれが植物への肥料や種子の拡散には好ましいのだが、無防備に糞をするから肉食動物の餌食になる。鳥よりも高等な哺乳動物、更にその中でも高等動物になるほど、垂れ流しからまとめて脱糞になるので、大きなシカなどウンコ山盛りではあるが、足取りはつかみにくくなる。

肉食動物は糞にきつい匂いを持つ。こうすることで草食動物は自分たちを捕食する肉食動物が存在することを察するのであるが、捕食のスベシヤリストネコ科の動物など土に穴を掘って糞をしたり、上に土や砂をかける習性を持つのは匂いを隠すためなのだ。

尾籠な話ついでにさらなる余談になるが、日朝併合以前の朝鮮半島には便所の概念がなく、ソウル市内の通りはウンコだらけだったことはイザベラ・バードの旅行記などにも書かれている。人の便を犬が食い、その犬を人が食うことでコリアンリサイクルが完成していたのだが、日本はこの神がかり的なリサイクルシステムを破壊してしまったのだ。

あまりの不衛生さに併合後の日本政府は屋外での排便を禁止する条例を出してしまった。この条例によって家の土間で排便するようになったのだが、雨が降ると流れ出した便が土に埋めたキムチの瓶に入り込んでしまい蛆がわく。その蛆を殺すために辛子を大量に放り込んだのがキムチの始まりらしい。

さて、話は戻り、守礼斥候隊長は奇妙なことに気が付いた。

この一団が歩いた後には道の上に無造作に糞をしたままになっていることだった。中国人は用便の後に紙を使わないが、便所の概念があるので、ここまで無造作に道の上に脱糞したままにはしない。もっと下等な種族ではなからうか？

守礼斥候隊長の發見は小隊に打電され、抗日パルチザンの朝鮮人であろう。何らかの理由で抗日パルチザンが八路軍を襲い双方大打撃を受けたと推測された。

急な電信だったため暗号を用いずに送られたこの電信を傍受していたソ連軍のスパイは、直ちにモスクワに向けて中国共産党と朝鮮の社会主義者が何らかの対立を起こして戦闘状態になったと連絡を入れた。

食料も底をつき、力尽きた瑞穂の一行からは脱落者が相次ぐようになった。倒れて動けなくなったものはその場で突き殺された。逃げ出した者もいたがゲリラには捕虜になる権利がないので、見つかり次第その場で射殺された。

守礼斥候隊長の部隊は集団から逃げ出した十人ほどのパルチザンを捕捉した。守礼斥候隊長は隊員たちに配置の指示を出して、一団がひとまとめになるように追い詰めた。

マタギの長をシカリと呼ぶ。シカリはそれぞれの獣の行動も熟知したベテランのマタギがなるのだが、守礼斥候隊長は抗日パルチザン狩りのシカリと化していた。

追い詰められた脱走パルチザンたちは捕獲され、取り調べを受けたのちに処刑された。

南に向かったつもりで北へ行軍した抗日パルチザンが黒竜江省の境界に達する頃には出発当初の1割、三十人程度しか残っていなかった。

吉林省の北端には関東軍に包囲された国民党の一団が残っていたが、敵の敵は味方と考えた瑞穂は国民党支配地域に入ろうとしていた。たとえ囚われたにしても、国民党に通じている運舫が何とかしてくれるだろうと期待した。が、瑞穂達パルチザン一行はここでも身が凍る恐怖を味わうことになった。

「道」と言う文字になぜ「首」が入っているのか？瑞穂は知ることとなった。

漢民族を裏切った漢民族「漢奸(かんかん)」として処刑された運舫の首が通りにさらし首になっていた。

奥田は漢字が読めなかったので意味が全然わからなかった。

瑞穂達パルチザン御一行はハルビンに向かう貨物列車に乗り込んだ。内蒙古からハルビン經由で石炭が運ばれており、帰りの便はその貨物が空になっているのでうまく乗り込めることができたのだ。

守礼さん達¹²⁶師団は捕まえた抗日パルチザンたちから、連中がハルビンに向かおうとしていたことを聞きだし、急きよハルビンに向かうことになった。

守礼さんたちが乗り込んだ列車の後部には、瑞穂たちが潜伏している貨物車両が接続され、一緒にハルビンに向かつて出発したのであった。

その列車を追いかけて走る男がいた。やがて列車を追い越し、そのまま北に向かつて走り去った。

一足先にハルビンに向かう秋田のネロさんだった。